甲状腺外科草子 144
哲人宰相：大平正芳余話⑭

杉野　圭三

苦難の総理

大平は総理就任後大平は民間人有識者による長期政策に関する研究会を 9 つ設置、内政では**田園都市構想**、外交では**環太平洋連帯構想**、**総合安全保障構想**などを提唱した。

特に日米安全保障関係を重視し、防衛予算を増額し、福田赳夫の「全方位外交」から対米協力路線へと転換した。

1979 年 6 月 28 日から**サミット**が東京で行われた。会議では OPEC 総会での石油価格値上げ決定により先進 7 か国は石油輸入抑制すべきだという方針を主張したため、大平は反対の立場で交渉した。カーター大統領らの援護もあり、ジスカール・デスタン大統領も賛成に回り何とか妥協案が成立した。

東京サミット（1979 年 6 月 28 日）迎賓館和風別館（同 29 日）

政権基盤が強固ではなく大平派、田中派など自民党主流と福田、三木らの反主流派との軋轢が続き、1979 年衆院選では大平の**増税発言**の影響で自民党が過半数を割り込み、大平の選挙責任を問う反主流派は大平退陣を要求した。大平は「**辞めろということは死ねということか、自分が辞めたら誰が総裁になるのか？**」として拒否。「**四十日抗争**」と呼ばれる党内抗争となり、自民党は分裂状態になった。

大平は福田と激論を交わした。加藤紘一官房副長官は語る。「**加藤君、福田さんは俺（大平）に辞めろと言った。しかし重ねて言うが、次に誰を総理にしたらいいと思う？**」加藤が答えられずにいると、「**俺が総理を辞めたら、日本のために総理にすべきは福田さんだろう**」と呟いた。

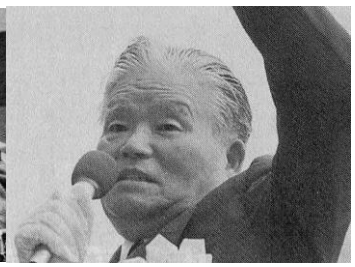
選挙後国会の首班指名選挙は、決選投票となった。大平は田中派・中曽根派渡辺系・新自由クラブの協力で 138 票を獲得、福田は三木派・中曽根派・中川グループの協力を得たが 121 票だった

第二次大平内閣（1979 年 11 月 9 日）

第二次大平内閣は竹下登大蔵大臣、後藤田正晴自治大臣、小渕恵三総理府総務長官、伊東正義官房長官、加藤紘一官房副長官などの顔ぶれであった。

自民党内では分裂状態が続いた。1980 年（昭和 55 年）5 月 16 日、社会党による内閣不信任決議案が提出され自民党反主流派は採決に欠席、可決され野党も驚いた。大平は不信任決議案可決を受け衆議院を解散**（ハプニング解散）**、**衆参同日選挙**となった。

大平内閣不信任案可決（1980 年 5 月 16 日）



新宿の演説（1980 年 5 月 30 日朝）　横浜の演説（同午後）

1980 年（昭和 55 年）5 月 30 日、選挙公示。大平は新宿で午前の街頭演説、午後から横浜市内 4 か所で街頭演説を行った。その後、体調不良となり 31 日午前 0 時 30 分過ぎ、虎の門病院に緊急入院した。

大平は以前にもニトログリセリンを服用することがあったが、公表はされていなかった。

虎ノ門病院記者会見（1980 年 6 月 8 日）　郷里豊浜の墓碑

一時は記者団の代表 3 人と数分間の会見を行えるほどに回復したものの、6 月 12 日午前 5 時過ぎ容態が急変、家族らに看取られながら、5 時 54 分死去。70 歳 3 か月、心筋梗塞による心不全と発表された。

国葬の意見もあったが、「控えめのほうが大平にふさわしい」という伊東の主張で**内閣・自民党合同葬**が行われた。郷里の墓に刻まれた親友である伊東正義の言葉が胸を打つ。

君は永遠の今に生き　現職総理として死す　理想を求めて倦まず　斃れて後已ざりき　伊東正義 謹書

（　一甲状腺外科医の徒然なる随想　）

2025 年 7 月 10 日